関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[文献紹介] 鈴木祥蔵著「解放教育」からの提言

著者	田中 欣和
雑誌名	教育科学セミナリー
巻	17
ページ	28-28
発行年	1985-12-07
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019519

文献紹介

鈴木祥蔵著

「解放教育」からの提言

明石書店　(1985. 11)

「『同和』保育と子どもの人権」と同じく著者が近年雑誌等に書かれたもので編まれているので、その観点については前者の評とともに見ていただきたい。ここでは、さらに特徴的と思われる若干の点にしぼって紹介しておきたい。こちらも14編の文が収録されている。

「『融和主義保育』の誤り」と題するものは、杉尾敏明氏の「『解放保育』論批判」への反批判として書かれた。杉尾論文は評者から見ると「国民融合論」派の最悪の側面を代表していると思われるので、ここで論争内容をとくに紹介はしないが、その反論のなかで著者が早くから折にふれて語って来た「民主々義」観がわかりやすく示されている。民主主義に次の4つの原則が含まれていると著者はいう。①「多数決原理」少数意見の位置づけを含んで成立する。方法論上の原則である。②「給食の民主々義」つまり平等の原則。小さい子にパンを半分、大きい子に2コということでは必らず差別が発生する。一応平等に配った上で小さい子が大きい子にわけるという自由と思いやりが許される。さらにゆたかになれば給食も各自がほしいだけ食べるバイキング方式に近づければいい。(その段階での指導は別の話である) ③「一人の民主々義」一人でも真実を求め、真実に従うということぬきには民主々義は崩壊する。マジョリティの立場からする「多数決原理」の一面化つまり「手の数民主々義」ではなく、マイノリティの立場に立って民主々義を発展させられるのはこの観点あってのことである。④「演劇の民主々義」つまり集団主義。各自が全体の目標を共有した時、それぞれの役割に応じて個性を発揮していく。号令の下に「整然」と動くといった機械的な「集団主義」は著者とは縁遠いものである。

もう一つとりだしておきたいのは「解放の学力」をめぐる議論である。部落解放教育運動における「学力保障」追求もややもすれば「追いつき、追いこせ」型になって受験学力志向にのみこまれてしまうということはすでに多くの人々によって指摘されている、著者はまず「学校概念としての“学力”」批判から説きおこす。

「解放教育における学力の問題」と題する章に収められたものは、他に、芸術・美術教育に関するものが3編、「『融即』と『隔離』」について論じたものが1編、さらに補遺として「国分一太郎さんの遺産を受け継ごう」という文である。この章の構成から、著者の最近の「解放の学力」をめぐる問題関心のありかがうかがわれるであろう。

現在、解放教育にかかわって来た教育学者の多くが再び「学校化された学力保障」の点検を課題としており、1、2年は論議が再燃しそうであるだけに、たとえば「集団主義の問題を美の教育の問題として考えていくときには類的存在という点から深める」といった著者の発想が重要となるであろう。

(田中欣和)